

# 「困ったときの博物館」をめざして 浦幌町立博物館

浦幌町立博物館 学芸員 持田 誠



浦幌町立博物館

HPはこちら



noteはこちら



## 十勝郡浦幌町

浦幌町立博物館は、十勝郡浦幌町が設置している公立の博物館です。浦幌町は北海道十勝地方の東端に位置する人口3,960人ほどの農林漁業の町です。十勝地方の中心地である帯広市と、北海道東部（道東圏と呼ばれる）の中心地である釧路市との中間地点にあたり、白糠丘陵しらぬかという低山地が十勝・釧路両地方の国境を形成しています。

浦幌町を中心に、この白糠丘陵一帯の歴史と文化、自然に関する資料を収集・保存、調査・研究、展示・教育といった活動を通して発信する拠点として、浦幌町立博物館が設置されています。

## 地域の産業遺産・近代化遺産

白糠丘陵は「釧路炭田」と呼ばれる道東屈指の石炭埋蔵地域であり、北海道で初めて石炭が採掘された場所でもあります。その西端に位置する浦幌町は、かつて十勝地方唯一の産炭地でした。1918（大正7）年に

開かれた浦幌炭鉱は、2回の休山を経て1954（昭和29）年まで操業。いまでも「炭山」の字名が残り、市街地から遠く離れた山奥にその痕跡が残っていて、本町の産業遺産となっています。

また、浦幌は十勝地方で最初に鉄道が開通した町でもあります。1903（明治36）年12月25日、釧路から旭川を目指して着工していた官設鉄道釧路線が浦幌まで到達。今日の根室本線で、白糠～浦幌は、いまでも明治



1903（明治36）年竣工で現役の根室本線乙部トンネル

開業時の面影を色濃く残す区間であり、当時のトンネルや危険品庫などが現在も活用されています。これらは近代化遺産と呼べる、道東の貴重な文化財であり、博物館では毎年秋に鉄道を活用した巡検事業を開催しています。

### 「困ったときの博物館」

特段の観光地でもない浦幌町に、なぜ博物館があるのでしょうか。それは、「地域の学術文化的な財産」を残していくためです。

当館が力を入れている活動は、地域の学術資源の発掘、地域の「記憶」の「記録化」、情報の集積と発信、そして「レファレンス」です。

国際博物館会議（ICOM）は、「博物館の定義」を以下のように定めています。

**「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、<sup>たの</sup>しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」**

誰もが利用でき包摂的…省察と知識共有…。私たちの町の博物館で、これを実現するためのもっとも基本的な博物館活動はなんでしょうか。私は、それがレファレンス機能かなと考えています。

レファレンスというのは、いわゆる「相談」です。「〇〇の資料を調べたい」にはじまり、「変わった虫がいたので名前が知りたい」「仏壇の奥から昔の写真が出てきたので調べて欲しい」「海のなかから温泉が湧いているらしいので探したい」「お雑煮に餡子<sup>あんこ</sup>を載せるのはおかしいのか？」「海岸にクジラが漂着したが貴重では？」「祖父が学徒動員で来た場所を特定したい」などなど、博物館には毎日のようにさまざまな相談が寄せられます。最初から博物館へやってくることもあれば、どこに相談したら良いかわからず役場に相談が入

り、役場から博物館へ回送されてくることもあります。

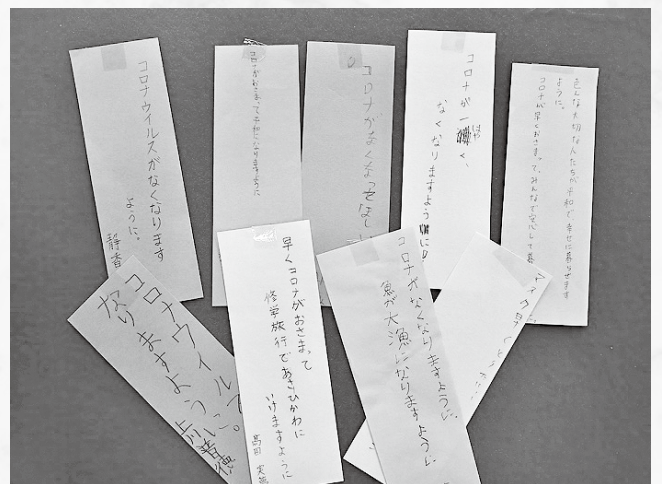
博物館では、こうした相談に直接回答することもあるれば、専門機関との仲介を果たしたり、調べ方を伝えた上でお手伝いしたりします。大事にしているのは、ご本人のお役に立てるとともに、活字やデータで記録して、「相談」を「地域の学術文化的な財産」に転換し、発信することです。

### 興味・関心の入口としての博物館

浦幌町の上田真弓教育長は、本町の教育について「深く広い『知』の海に触れながら、自ら学び、挑戦する力をつけることを大事にしていきたい」と方針を述べています。そして「疑問をもつ」「問題を見出す」など、自分の周りを捉えようとするのが出発点であり、その入口としての可能性を有する博物館を、教育資源のひとつとしています。博物館のレファレンスには、そうした教育の要素もあるのです。

「どこに相談したら良いのかわからないことは、とりあえず博物館へ相談してみよう」。近年、そういう空気が定着してきているのを感じています。それこそが、自治体が博物館をインフラとして抱える意味であり、ICOMが<sup>うた</sup>謳う「コミュニティの参加とともに博物館は活動する」ということではないかと思っています。

浦幌町立博物館は、これからも「困ったときの博物館」の充実を目指して取り組んで参ります。



コロナ禍の際の七夕の短冊も地域資料のひとつ